

# カフェ・スノードーム

石井睦美 文  
杉本さなえ 絵

こんな質問をしてみましようか。

「カフェ・スノードームを知っていますか？」

すると、ほとんどのひとは「そんなお店は知らない」と答えるでしょう。そしたらわたしは、そうでしょう、そうでしょうというふうにながききます。

もし、「知っている」とか「行ったことがある」という答えがかえってきたら、わたしはもういちど「それはなんのお店でしたか？」とたずねます。

「カフェにきまっているじゃないですか」、そんな答えだったら、わたしはちがうというように首を振りまます。

たしかに、この広い世界には、カフェ・スノードームという名前のカフェは存在することでしょう。だから、そう答えたひとがうそをついたのだとはみじんも思いません。ただ、それはべつのカフェ・スノードームなのです。なぜなら、わたしがたずねたカフェ・スノードームは、カフェではないので

すから。

じゃあ、いったいなんのお店なんだろうと、そう思うのは無理もありません。

けれど、それを説明するのはとてもむずかしいのです。カフェではないし、本がたくさん並んでいます。本屋ではありません。ヴァイオリンも宝石も飾られています。楽器店でも宝石店でもありません。そのどれも売ってはいないからです。棚にはほかにも素敵な箱がいくつも置いてありますが、やっぱり買うことができません。

カフェ・スノードームは、ありふれた町——もしかするとそれは、あなたの町かもしれません——のありふれた住宅街にあります。その住宅街のなかでひととき古い家、それがカフェ・スノードームです。

入り口の扉と窓をのぞけば、壁いちめんがツタで覆われていて、入り口近

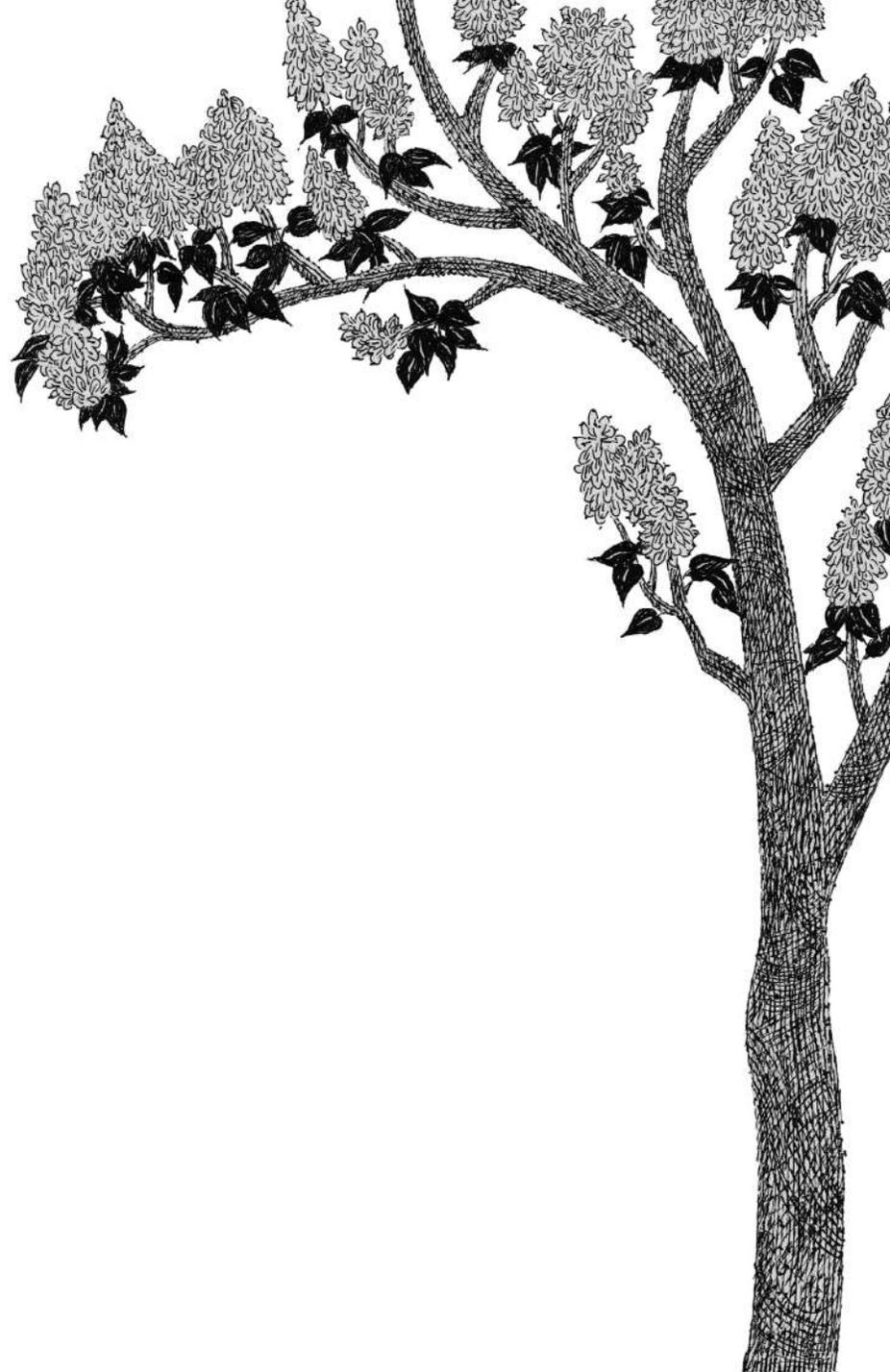
く、ツタに埋もれるように小さな木の看板がかかっています。

そんな家が、ひとの目につかないなんてこと、あるはずがない。きっとどれもがそう思うでしょう。

でも、そうなのです。ほとんどのひとにとっては、カフェ・スノードームはないのと同じなのです。そこが、カフェ・スノードームのいちばんふしぎなところですが、もちろんそれだけではありません。ほかにもいろいろなふしぎがあります。

そのふしぎをもっと知りたくなったら、どうぞページをめくってください。

カフェ・スノードームのふしぎを知るには、それがいちばんいい方法だと思います。



いまいるとこをでられなきや  
9

古い木には甘いぶどうが  
41

記憶の野原にあるものは  
73

ぬれた小犬はどこですか  
105

クリスマスのおくりもの  
133



いまいるところをでられなきや

カフェ  
スノーピーク

「ちよつと、萌花、どこに行くつもり？」

怒りと動揺と心配とが、ぴったり1対1対1の割合でまざりあっているママの声を無視して、わたしは玄関から飛びだした。最初の角を曲がるすこし手前で、出がけにひっかけてきたオーバーコートのボタンをとめるために、わたしは立ち止まった。

いまのわたしはハリネズミ。ほら、からだじゅうのハリが逆立っている。

こころのなかでそうつぶやきながら、ひとつひとつ、ボタン穴にボタンをはめていく。ハリが逆立つのは感情が荒ぶっているからで、そんなときでもちゃんとコートを着たのはわたしが理性的な女の子である証拠。そしてあんな状況にもかかわらず、ママの声から、そのときの心情と、その構成要素の割合を正確に分析してしまうわたしは、理論的でもあるということね。

そう思いながら、最後のボタンをとめ終えると、こころはいくらか落ち着きを取り戻して、逆立っていたハリも元に戻りはじめていた。

立ち止まったまま、いまや数メートルほど後ろとなったわが家を、わたしは振り返って眺めた。

家はなにごともなかったかのようになり、それどころかたとえなにごとがあつたとしても、ここからは一步も動かないぞというように、建っていた。

「いつまでもそうやって建っていないさい」

家に向かって人差し指をつきだし、わたしは声を出してそう言った。言う相手が違ったような気もしたけど、優花に向かってなら「建っていないさい」は「立っていないさい」になるんだという考えがちまちま浮かぶ。やっぱりわたしって理論的だ。

けんかをして優花を泣かせ——というか今日も勝手に優花が泣いて——、ママに「どうしてあなたはいつも妹を泣かせるの？ いいお姉さんになるうという気持ちはないの？」と言われた。ママはいつだって、優花の味方だ。それで、理由も聞かずにわたしを怒る。ま、理由を言ったところで、聞く耳を持ってないと思うけど。

で、結局、わたしがまんする。でも、わたしだってもうがまんできないってなることがある、んだなあ。それで、がまんできなくなると、とんでもないことを思いついて、とんでもない行動を起こしてしまうものらしい。これにはじぶんでもびっくりだったけど。びっくりしたのはわたしだけじゃなかった。ママもだった。わたしの本気のように、



ママはパニックをおこした。怒りと動揺と心配の1対1対1のパニックって、なんだかすごい。

でも、きつといまごろは、怒りが消滅して、動揺と不安が1対2くらいの割合でママのころを占めているんじゃないかな。だとしたら次の行動は、あわてて追いかけてくる、となるはずだ。それでドアのあたりをしばらく見ていた。でも、ドアはまったく開かなかった。

もちろん追いかけてきてほしいなんて思ったわけじゃない。むしろ追いかけてなんかほしくない。だけどそれって、どうせすぐに帰ってくると、わたしの行動というか、決意が軽くみられているということ、それがくやしい。

くやしいけれど、くやしがるのは負けを認めてしまったみたいで、もっとくやしい。わたしは深呼吸をした。気持ち落ちつかせるために。泣かないために。大きく一度。ほら、わたしって、冷静な女の子だから。

十二月の最初の土曜日の午後の明るく冷たい空気が、わたしの肺のなかにはいつてきた。新鮮な空気。すると、くやしさとあべつ、新鮮な感情が生まれてきた。